

# 追悼 上岡勇司先生

吉 見 孝 夫

昨年の一月末に、上岡勇司先生を入院中の病室に訪れ、お見舞いかたがた『語学文学』第三十二号編集の最終的な詰めについて御判断を仰いだ。再度の御入院で面やつれの御様子ではあったが、いつもながらの行き届いた御指示に一安心し、近いうちの復帰を確信して退出したのが、先生との永のお別れとなってしまうた。一九九四年二月十五日、先生は五十二年の生涯を閉じられた。

一九七四年に母校札幌校に赴任されてからの二十年間、先生は何よりも良き教育者であったと思う。その御指導は、御自身の考えを押し付けるのではなく、学生と共に考えてその能力を最大限に引き出すとする方法であった。時に非常識な学生がいても、声を荒げることなく諄々と理を説かれるので、生意気な者も自ずと従わざるをえない、そんな雰囲気から先生からは醸し出されていた。そういふなかから学生との共同作業によって上岡ゼミの研究誌『国文学研究叢書』が生まれたのである。これに載った学生の論文のなかには学界で高い評価を得たものもあると聞く。

先生の御研究の対象は多方面にわたるが、特筆されるべきは恩師小泉弘先生の説話研究の伝統を受けつつ和歌説話という分野をほとんどお一人で開拓され、そこから大きな実りを国文学界にもたらされたことであろう。その成果の一部は一九八六年に『和歌説話の研究 中古篇』としてまとめられたが、これが「中古篇」と銘打たれ

ているように、当然「中世篇」「近世篇」を構想されていたようである。それが業半ばで途絶えてしまったことは、先生御自身の無念はもとよりのことではあるが、学界もまた失ったものの大きさを思い知らされるに相違ない。

大学にとってもその損失は余りに大きい。札幌・岩見沢の国語科に、本学の先頭をきって大学院が設置されたのは先生の御奔走による。新設の大学院のカリキュラムが整えられたのも、最初のカリキュラム委員長に就いた先生の御尽力の賜物である。これから後発の大学院を含めて一層カリキュラム整備を進めなければならぬ矢先であった。入院中の一月に先生は附属小学校長に就任された。学校運営にも夢を描いていらっしやったに違いないが、この面での手腕を發揮される暇も与えられなかったのは残念という他ない。

先生の生来とも思える明るさ、誰をも受け入れる包容力に救われる思いがしたのは幾度であろうか。それが私一人のことでないのは、先生の豊富な人脈から容易に想像された。先生は仕事を他人任せにせず御自分に抱え込んでしまわれるタイプだが、御心労もあつたらうに一切愚痴めいたことを口にされることはなかった。私どもはそれに甘え過ぎていたようだ。

機嫌よく酔えば必ず披露された、上岡流の琉球踊りを拝見することももうない。御冥福をお祈り申しあげる。